

埴谷雄高『死霊』における非対称の論理

立命館大学大学院応用人間科学研究科

対人援助学領域 人間形成・臨床教育クラスター

小松 真也

埴谷雄高を現在に問うとき、彼は我々にいったい何を語り聞かせるだろうか。本論文はこの一文を主題とすることで、埴谷雄高の論理および思考法を、その主著である『死霊』に駆使された文章上の表現技法をもとに捉えなおし、そこに浮かび上がったものから現在を問うという体裁をとって論考を進めていくものである。

埴谷雄高とは、現在、戦後派と称されている日本人作家の一人である。埴谷は、1909年（明治四十二年）12月19日に台湾の新竹に生まれ、戦前戦後の青年期を革命運動の活動家として過ごした後、転向を経て1998年（平成九年）に逝去されるまでのあいだ、主著である長編小説『死霊』を執筆しつづけたほか、その過程で小説家としては珍しく数多くの政治論文を書いたことでも有名である。埴谷の死をもって未完となった『死霊』には、執筆開始から数えた五十二年間という年月だけでなく、構想期も含めれば埴谷の生涯を通じた思想や思索が多分に包含されている。『死霊』を論じること——主にそこに表現された技法を論じること——を介して、埴谷雄高という作家を捉えなおすことの可能性は、埴谷と『死霊』との生涯にわたる関係に依拠したものである。この両者を結ぶ関係性を本論では、埴谷雄高の求めた非時代性や虚構性と、それに反して『死霊』の有することになる同時代性と現実性とを結ぶ形において明らかにした。

『死霊』に表現された技法を考察するために、本論においては、漸層法（ぜんそうほう）と対照法（たいしょうほう）の二つの修辞技法に焦点をおいて論じた。そのうえで『死霊』に使用されたこの二つの修辞技法には、定型たる使用法とは異なる、埴谷ならではの独特な使用法があることがわかった。この独特な技法が使われるにあたって埴谷にはどのような論理が働いていたのかを考察すると、そこには、埴谷が考察する対象を往々にして非対称な形で捉えようとする思考法が見られた。こうして見出された論理を、埴谷雄高の非対称の論理として捉えようとするのが本論の主眼である。